文学部論集　第90号（2006年３月）

『茶館』の第一幕について

辻　田　正　雄

〔抄　録〕

『茶館』には数種類の版本がある。これは、舞台上演にあたって演出家や俳優が提起した意見に老舎が従ったことによる。書き換えは、北京方言を普通話に変えたり、文意を明確にするために行なわれている。これは第一幕の版本の異同によって知ることができる。

『茶館』のことばは普通話である。わずかながら使用されている北京方言は、主に接尾辞“-达”、“-莫”、“-乎”、“-腾”などを伴う詞語に特徴が見られる。これらの詞語は普通話の語彙に吸収されているか、吸収されつつあるものである。

キーワード　『収穫』、北京人民芸術劇院、北京方言接尾辞

１．問題の所在

話劇『茶館』は老舎の代表的劇作のひとつである。特にその第一幕は高く評価されている。曹禺は「『茶館』の第一幕はすばらしく、永遠に伝えられるべき文章である」(1) と絶賛している。

第一幕に対する高い評価は定着していると言えよう。藍愛国によれば、「第一幕と他の二幕との間には、芸術的水準の面でかなり大きな差が存在している」が、それは「第一幕が複雑な歴史と現実を複雑なままに反映している」のに対し、「第二幕、第三幕は、実に多様である社会的矛盾のぶつかりあいを単純化している」ことにある(2)。

本稿は、『茶館』の第一幕について、そのことばを中心に考察しようとするものである。『茶館』のことばは基本的に普通話であり、北京方言の使用は極力抑えられている(3)。では、わずかながら用いられている北京方言あるいは北京味を感じさせるものはどのようなものであるのか。また、作中の人物像を鮮明にするためにセリフにどのような工夫がなされているのか。これらの点を中心に分析を進める。

2．雑誌発表まで

『茶館』は三幕の話劇であり、はじめ雑誌『収穫』創刊号に発表された。老舎の説明によれば、「ひとつの大茶館はひとつの小社会であり」、茶館を舞台に五十年来の社会の変遷を描き出し「三つの時代を葬送」しようとしたものである(4)。

そもそも『茶館』の執筆の意図は新中国成立後の憲法と関連があり、それで清末の康有為や梁啓超の改良運動を時代背景とする場面から始まるのだと言う(5)。

また焦菊隠は、「第一幕はもともとは普通選挙に関する初稿のうちの一場面であった」(6) と述べている。ここで言う普通選挙とは、直接的には1953年から54年にかけて行なわれた全国人民代表の選出のことを指すのであろう。

老舎が『茶館』の前本である『秦氏三兄弟』(7) の創作を始めたのは1956年で、同年8月に一応書きあげたとされる(8)。それを書き換えて『茶館』の第一幕に生かしたものを完成したのは同年12月頃である(9)。

老舎は憲法を宣伝する目的の話劇を執筆しようとした。つまり政策に積極的に呼応しようとした。

それならば、普通選挙が行なわれた1953年から54年の頃ではなく、なぜ1956年に老舎は執筆しているのだろうか。また、北京にいる老舎がなぜ上海で創刊された『収穫』誌に作品を発表したのだろうか。

老舎やその他の関係者はこれについて直接何も語っていないが、おそらく、これは「百花斉放、百家争鳴」（双百）政策と関連する。1956年に提唱された双百政策に老舎は積極的に呼応するように求められていたと思われる。

次に掲げるのは1952年頃のことについて述べた証言であるが、老舎は政策に呼応した作品を執筆するにあたって党内文書の提供を受けていた。欧陽山尊は次のように証言している――「老舎は党員ではありませんでしたが、党内文書をできるだけ老舎に見せるようにと廖沫沙は私に言いました。老舎が政策を根本からよく理解できるようにするためです」(10)。このことから推測するに、おそらく1956年に憲法を宣伝することを老舎は示唆され、それで『秦氏三兄弟』を執筆したものと思われる。

『収穫』誌に発表されたのもこれと同様に双百政策と関係している。

『収穫』は1957年7月24日に上海で創刊された。創刊された時には反右派闘争が始まっているが、準備は当然それ以前からなされている。双百が提唱された頃に準備されているのである。実は創刊には半年以上の準備がなされている。その当時発行されていた文学雑誌が千篇一律であるとして、さまざまな様式の大型の文学雑誌の創刊を、劉白羽が中央宣伝部のある会議の席で提案したのである。当時、劉白羽は中国作家協会党組副書記であった。

劉白羽は、三十年代に鄭振鐸や靳以が中心になった『文学季刊』のような文学雑誌の創刊を提案した。その後中央宣伝部の会議で同意が得られ、中国作家協会の刊行物として上海で発行されることになった。上海で発行することに決まったのは、当時文学界には京派、海派などの派があったことと、それと同時に派の別を超えて上海にいた巴金が文学界全体に声望があったためである(11)。

北京居住の老舎の作品が、上海で創刊された『収穫』に発表されたのは、このような文学界の事情を背景にした団結の象徴という意味があったからである。『収穫』創刊号にはその他に魯迅の「中国小説的歴史的変遷」とともに、艾蕪（1904－92。四川）と康濯（1920－91。湖南）の作品が掲載され、「より多くの作家、とりわけ老作家たちの団結」が謳われている(12)。

3．公演から単行本発行まで

『茶館』は、脚本が『収穫』に発表されるより前の1957年4月には、北京人民芸術劇院の焦菊隠によって演出されることも決まっていた。しかし反右派闘争が始まり、公演はすんなりとはいかなかった。焦菊隠を右派とするかどうかが北京人民芸術劇院の反右派闘争における最大の難題であった。北京市委員会宣伝部や統一戦線部で何度も検討されたが結論が出なかった。

焦菊隠（1905－75）は1934年から38年までフランスに留学し、帰国後は広西大学教授等を務めた。新中国成立後、北京師範大学文学院院長となり、1952年には北京人民芸術劇院の副院長に任ぜられている。焦菊隠は非党員で、演劇面では当時支配的であったスタニスラフスキーシステムの打破を考えていた。

反右派闘争での整風小組をとりしきったのは欧陽山尊（1914－　）である。焦菊隠をかばったのは趙起揚（1918－96）である。趙起揚は1938年に入党し陝甘寧辺区文協秘書を務めたことがあり、当時北京人民芸術劇院党委員会書記であった。

そもそも北京人民芸術劇院は合併によって1952年に創設された。曹禺（1910－96）が院長に就任した。焦菊隠、欧陽山尊、趙起揚の３人が副院長であった。

欧陽山尊と焦菊隠、趙起揚の関係はあまり良くなかったらしい。欧陽山尊はソ連の演出に忠実であまり柔軟性がなく他の二人と意見の衝突がよくあったとされる(13)。

焦菊隠に対する処遇をめぐって北京市委統一戦線部部長の廖沫沙が欧陽山尊と趙起揚の意見を求め、趙起揚は「焦菊隠が意見を述べたのは業務上のことについてである。それは政治傾向にかかわるような問題ではない。彼は解放以前から進歩的であった」と述べた(14)。

結局、焦菊隠に対しては「保護を加えながら教育的批判を行なう」という処遇になった。右派としないということである。「教育的批判」は1957年10月18日から連続して3日間にわたって進められた。焦菊隠も鳴放時期の「反党」的言行に対する批判を受けいれた。これによって『茶館』は焦菊隠の演出によることが確定した。そして焦菊隠を助けるために夏淳（1918－96）も

演出に加えられた。夏淳はかつて焦菊隠が創設した北平芸術館のメンバーで、焦菊隠を自分の師と仰いでいた。夏淳を加えたのは趙起揚の配慮であったのかもしれない。北京人民芸術劇院の反右派闘争は1957年11月18日に一応終わる。これ以後『茶館』の公演に向けて準備が進められることになる。

これまでの経緯とその後の展開を年表に整理してみると次のようになろう。

1956年 5月2日	毛沢東、最高国務会議で双百の方針を打ち出す
5月26日	陸定一、双百提唱
8月	老舎、『秦氏三兄弟』完成。そのうちの『茶館』の場面を独立させて書き換えへ
12月頃	『茶館』完成
1957年 4月	『茶館』の演出を焦菊隠に決定
6月6日	中国作家協会党組拡大会議、丁玲と陳企霞を反党集団と批判
6月8日	反右派闘争はじまる
7月24日	『収穫』創刊
10月18日－20日	焦菊隠に対する「教育的批判」
11月18日	焦菊隠、右派とされないことで北京人民芸術劇院の反右派闘争決着
12月2日	老舎、俳優を前に『茶館』を朗読
12月3日	老舎、『茶館』の意図、構想を語る
12月19日	『文芸報』、『茶館』に関する座談会を開催
年末	焦菊隠、舞台稽古の場に姿をあらわす
1958年 3月5日	老舎、リハーサル後に人物の設定、演じ方等について意見を述べる
3月29日－7月10日	首都劇場で『茶館』公演
6月	戯劇出版社より単行本『茶館』を出版
1959年 9月	人民文学出版社より単行本『茶館』出版

4．版本

次に版本をみてみよう。脚本の主な版本は次の1～14である。

1．《收获》 1957年创刊号〔1957年7月24日〕

2．《茶馆》 中国戏剧出版社、1958年6月北京第1版第1次印刷

3．《老舍剧作选》 人民文学出版社、1959年9月北京第1版

４.《老舎剧作选》 人民文学出版社、1978年5月北京第2版

５.《茶馆 三幕话剧》 四川人民出版社、1980年5月第1版

６.《茶馆》 中国戏剧出版社、1980年6月第2次印刷

７.《老舎剧作全集·第二卷》 中国戏剧出版社、1982年8月第1版

８.《龙须沟　茶馆》 人民文学出版社、1985年3月北京第1版

９.《老舎文集·第11卷》 人民文学出版社、1987年5月北京第1版

10.《〔中国现代名剧丛书〕茶馆　龙须沟》 人民文学出版社、1994年9月北京第1版

11.《老舎全集·第11卷》 人民文学出版社、1999年1月北京第1版

12.《〔百年百种优秀中国文学图书〕茶馆》 人民文学出版社、2000年7月北京第1版

13.《〔世纪经典书系〕茶馆》 浙江人民出版社、浙江教育出版社、2001年6月第1版

14.《北京人艺剧照插图本:茶馆》 人民文学出版社、2002年10月北京第1版

次の15は上演台本で1979年演出本である。

15. 北京人民艺术剧院《艺术研究资料》编辑组编《〈茶馆〉的舞台艺术》 中国戏剧出版社、1980年7月第1版

これ以外に文芸大系等に収められた主なものとして次の16～18がある。

16. 十八所高等院校当代文学教材编写组《中国当代文学作品选》(下册)　河北人民出版社、1981年12月

17.《中国新文艺大系〔1949―1966〕戏剧集(上卷)》 中国文联出版公司、1991年8月

18.《中国新文学大系1949―1976》第十五集　上海文艺出版社、1997年12月

16、17は３の《老舎剧作选》の系統を底本にしていると思われる。18は初出の１を底本とする。

第一幕について版本を比較してみよう(15)。以下、最初の数字は『老舎全集』第11巻のページ数を示す。例えば　287 - 26　は287ページ26行目にこの部分が見られることを示す。

高橋弥守彦（1988ⓐ）に拠って版本の異同を整理すれば、主として次の４点になる。

①　内容に関わる部分

287 - 26　将，你完了！　　で第一幕が終わるという処理をしているかどうかである。

②　北京方言の使用に関する部分

278 - 15　卖到窑子去，也许多拿两儿八钱的　　の部分で、「两儿八钱」（北京方言）を用いているか、「一两八钱」（普通話）に書き換えているかどうか。

③　語義の明確化

272 - 22　有作天师的希望　　の部分で「希望」（「願っている」なのか「見込みがある」なのかが曖昧）を「愿望」（「願っている」の語義が明確）に書き換えているかどうか。

④　簡体字や評点符号などの表記が規範的かどうか

その他、ト書き部分にも若干の異同が見られるが、重要な異同は上記の①～③である。

次にこの部分の異同を対比させてみよう。それぞれ採られた方に○印、そうでない場合は×をつける。1～15は上記の版本の番号で、その次の項はその略称である。

版本	略称	希望	愿望	两儿八钱	一两八钱	将，你完了
1	收获	○	×	○	×	×
2	1958戏剧	○	×	○	×	×
3	1959人民	×	○	×	○	○
4	1978人民	×	○	×	○	○
5	四川	×	○	×	○	○
6	1980戏剧	○	×	○	×	○
7	剧作2	×	○	×	○	○
8	龙·茶	×	○	×	○	○
9	文集11	×	○	×	○	○
10	名剧	×	○	×	○	○
11	全集11	○	×	○	×	○
12	百年百种	×	○	×	○	○
13	世纪经典	×	○	×	○	○
14	人艺剧照	×	○	×	○	○
15	舞台	×	○	×	○	○

以上のことから版本の系統は次のように整理できるであろう。

1→2→3→4、5、7、8、9、10、12、13、14
　　↘6→11

ここで11の『老舎全集』については少し説明が必要であろう。

『茶館』などの脚本は、最初、他の出版社から出版されてその後に人民文学出版社から決定版が出版された、とされる(16)。そして『老舎全集』の出版にあたり、「歴史を尊重し、作者を尊重し、可能の限りを尽して初版本あるいは初出に拠り、いかなる改変も加えなかった」(17)と説明される。しかし、既に見たように『老舎全集』本が底本とするのは、6の中国戯劇出版社の1980年6月第1版第2次印刷本である。これはおそらく、2の中国戯劇出版社の1958年6月第1版第1次印刷本を参照せずに、第1次印刷本と第2次印刷本が全く同一であると誤認したためであると思われる。

老舎は北京人民芸術劇院の演出家や俳優を高く評価しており、セリフについて彼らの意見に従って改変することもあった、と言う(18)。

老舎生存中に出版されたのは１～３の版本である。３の人民文学出版社版が老舎の決定稿と考えてよいであろう。

また、15は1979年の公演台本であるが、第一幕部分については1958年の初公演とほとんど同じである[19]と言う。

５．人物像

『茶館』の人物の描き方はセリフに工夫がこらされている。曹禺は「そのひと言にその人物像が反映されている」[20]と高く評価している。そしてそのセリフは、俳優が創造性を発揮できる余地を残したものでもある[21]、と言われる。演出を担当した焦菊隠はセリフや動作について意見を述べ、老舎も納得すればそれに従った。

次に人物像に関わる俳優の証言を中心に記してみよう。王利発や常四爺については既に多く語られている[22]ので省略する。

①　大傻楊

大傻楊は数来宝をする乞食である。数来宝とは曲芸の曲種で、一種の門付けである。辞書的には次のように説明される――「由于艺人把商店经营的货品夸赞得丰富精美，“数”得仿佛“来”(增添)了“宝”，因而得名」[23]。

数来宝をする大傻楊は、演出家と俳優が検討を行なって、登場人物に加えるように老舎に提案したものである[24]。大傻楊は幕の始まりを告げるものであり同時に劇中の人物である[25]、として重視したのである。大傻楊の数来宝によって時代背景やストーリーが理解しやすくなるし、この語りの部分に北京方言の特色がそのまま残されている。

②　馬五爺

『秦氏三兄弟』の馬師傅は武芸の師匠で現在は誰からも相手にされないという設定であった。『茶館』ではキリスト教勢力を笠に着た馬五爺として登場する。第一幕の時代設定の1898年当時、キリスト教に関わる仕事に就いていた中国人はたいへん威張っていた[26]。

脚本で　277 - 10　马五爷：二德子，你威风啊！となっている部分が上演では、

马五爷：二德子！

二德子：喝！马五爷，您在这哪！

马五爷：你威风啊！

と、うまく間をとっている。

この「你威风啊！」には、「有我在这里，你竟敢逞威风吗？」[27]の意味を込めたセリフである。

馬五爺自身のセリフは少ないが、王利発が

277 - 22　刚才您说洋人怎么样，他就是吃洋饭的。信洋教，说洋话，……　と常四爺に語る部分で馬五爺の人物像をより鮮明にしている。

また舞台では馬五爺が十字を切る場面があるが、これは馬五爺を演じた童弟が考え出したものを焦菊隠が取りいれたものである[28]。

③　龐太監

龐太監の年齢設定は脚本ではすべて「四十岁」であるが、上演台本では「六十多岁」に変えられている[29]。これは龐太監を演じた童超が自分の考えによって設定を変更したものである[30]。

童超は宦官役を演じるにあたって、かつて西太后に仕えた耿太監を訪ねている。耿太監は1958年当時八十数歳であった。童超は宦官が何故に妻を娶るのかが最初は理解できなかったが、この訪問を通じて、自ら生殖能力を失った人間が、妻を娶って他の人に見せつけ、そのことによって精神上の安定を求めたといった屈折した心理を理解するようになった。ただ宦官特有の声を出すのには童超は苦労したらしい。宋鳳儀に就いて何度も練習したと述べている[31]。

④　二徳子

二徳子は用心棒をつとめたり、ふだんは悪行の限りをなして一般の人を苦しめる類の人物として設定されている[32]。

二徳子が馬五爺にたしなめられる場面でのセリフがその性格を特徴的に表している。

277 - 14　这儿的茶钱我候了。

この場面で、「候」によって二徳子が馬五爺のような権勢を持った人間とつながっているのだという二徳子の誇示を表している。

また常四爺との対比で人物像をよりきわだたせている。

276 - 26　常四爷：可没见您去冲锋打仗

ここで常四爺によって話題にとりあげられている圓明園が焼かれたのは1860年である。二徳子は「二十多岁」という設定であるから、ここの「您」は直接二徳子を指しているのではない。「您」は敬意を表しているように見せながら相手を軽蔑した気分を込めており、複数の二徳子を表している。

⑤　松二爺

松二爺は常四爺と同様、清朝の禄を食む旗人で「吃钱粮的」[33]であるが、常四爺と違うのは松二爺が「黄鸟」と「请安」によってその特徴が表されているということである。この２つはいずれも第二幕ではすでに消滅してしまったものとされる。消え行く清朝の象徴として設定されている。

⑥　唐鉄嘴

唐鉄嘴は「铁嘴」の名でも判るように「相面为生」であると「人物表」で設定されている。「铁嘴」は「絶対確実なことば」の意味から占師のきまり文句の意味となり、旧詞で「指算命先生」[34]であるとされる。そして第一幕の最初の王利発のセリフが、茶館での唐鉄嘴の地位をよく示している。

275 - 27　唐先生，你外边蹓蹓吧！

唐鉄嘴は「先生」と呼びかけられてはいるが、体よく追い出されるのである。清末、「爷」が成人男子に対する尊称であるのに対し、「先生」は「算命先生」の用例に見られるように、講釈師や人相見などに対する尊称である。ただ尊称とは言えそれほど尊敬されているわけではない。「算卦的瞎子皆为江湖术士，……并没有真是学问和高尚地位，但这些人穿戴打扮确实像位“夫子”」(35)であるところから「先生」と呼ばれるにすぎない。そしてそれに対する唐鉄嘴のセリフが人物をよく表している。

276 - 1　(惨笑)王掌柜，捧捧唐铁嘴吧！送给我碗茶喝，我就先给您相相面吧！手相奉送，不取分文！

この部分には唐鉄嘴の職業だけでなく、人に媚びるずるい性格と、だがあまり豊かでない唐鉄嘴の生活状況を示している(36)。

6．事物、風俗習慣

既に述べたように、老舎は茶館を通じて社会の変遷を描こうと考えていた。「ひとつの大茶館はひとつの小さな社会である」からである。次に老舎が『茶館』に反映させようとした社会的背景がよく表されている事物を挙げてみる。

①　茶館

老舎は少年時代に近所に茶館がありよく行っていた(37)。1958年頃には劇に描かれたような茶館はもう存在していなかったが、安定門内にもとの茶館の原形を留めている建物があり、また前門にあった小茶館では鳥かごを持った客や一日中将棋をしたり世間話をして過ごす老人たちがまだ見られた、と言う(38)。

脚本を読んで金受申は、これは大茶館というよりも二葷鋪であると言った。大茶館は紅爐館、窩窩館、搬壺館の３種類に二葷鋪を加えてこの４種類を総称するが、厳密には前３種類と二葷鋪を区別することもある。金受申がこう述べたのは、二葷鋪の特徴のひとつである「烂肉面」が用意されているからであろう(39)。

②　毎城

274 - 10　每城都起码有一处

とあるが、清朝末期に北京には内城と外城をあわせて10の「城」があった。すなわち、内城に東城、西城、南城、北城および中城があり、外城にも同様に東、西、南、北および中城があった。外城は民国時代には南城と呼ばれるようになる(40)。1900年以前は北京には大茶館が林立していた(41)。

③　莫談国事

275 - 10　各处都贴着的“莫谈国事”纸条

「莫谈国事」は第一幕のみならず全篇を貫く重要なことばである。これは客の言動が原因で

茶館側に累が及ぶのを避けるためである。次の説明が簡にして要を得ている――「京師酒館之各室，每有一紅紙條掲於柱上，書四字曰『莫談國事』，慮有御史適在隔室，據所傳聞，登之白簡也，且或有言侵犯親王貝子貝勒及宗室覺羅，至有後患耳」[42]。

④　鴉片

271 - 5　吸鴉片

北京の阿片は、清代には「廣土」、「雲土」、「俄國紅包土」などが有名であった[43]。

また次のような記述もある――「それからシャムに行った。そこでわれわれは商品の一部を阿片とアラック酒と交換したが、阿片はシナ人の間では非常に高価で取り引きされ、当時需要の大きな商品であった」。「澳門ならわれわれがもっている阿片も間違いなく良い値で売れたはずだ」[44]。これはアヘン戦争よりもはるか以前の18世紀はじめのことである。

⑤　相面

271 - 5　相面为生

タバコの箱の外装である煙画に描かれた三百六十行のひとつに「相面」があり、「張鐵嘴談相」の画が掲げられている[45]。

この職業に触れた記述によれば、前門天橋あたりに八卦見や人相見が多かったが、民国に入ってから増えたという。これは民国に入って内政が不安定で多くの人が失業し人々が不安な気持ちから、八卦や人相を占ってもらうことが多かったからだとされる[46]。

⑥　洋

280 - 4　洋鼻烟，洋表，洋缎大衫，洋布裤褂

中国に輸入された事物は「番」や「夷」の文字をつけて称されるのが普通であったが、19世紀60年代以後は少なくなる。かわって「洋」が用いられるようになったからである。

19世紀後半になると中国に輸入される「洋貨」が多くなった[47]。「洋」は、最初は価値評価を伴わないことばであったが、西洋の事物が大量に流入し、西洋人の勢力増長とともに「洋」と「文明」は同義になっていった[48]。

⑦　草標

282 - 15　小妞的头上插着一根草标

「草标　cǎobiāor」は「插在货物上的草棍儿，表示货物要出卖的标志」[49]と説明される。清末に子供の頭に挿して売り物としたかどうかは不詳であるが、貧困から子供を売ることはあっただろうから、このように描くことは効果的であると言えよう。

⑧　その他

死語あるいは旧詞は古い時代を象徴する。そのようなことばとして『茶館』で使われている主なものに下記がある。

㋐　王法

286 - 9　我这儿可带着“王法”呢！

「王法 wángfa」は「本来是君王统治人民的法律，引申为施加于犯人的刑具，如脚镣、手铐、铁链子之类」[50]である。これは死語の意識的使用と言えよう。

㋑　窑子

286 - 15　卖到窑子去

これは旧社会の賤業に関することばである。

㋒　跑堂的

271 - 9　裕泰的跑堂的

「～的」の類は職業的蔑視が反映されたことばであるとして、現在では「服务员」と言い換えられる[51]。

以上見てきたように、これらは時代背景を鮮明にすることばとして効果的に用いられている。

7．口語

次に、慣用語と接尾辞を中心に口語表現についてみてみよう。

㈠慣用語

①　271 - 18　甜不到那儿去

これは「形容詞＋到哪儿去」の形式で、「用反问形式表示“不＋（形容词）”的意思。在陈述句中说“（形容词）＋不到哪儿去”」を表わす[52]。

②　279 - 20　要不怎么说

これは北京の口語に多く見られ次のようなニュアンスを表わす――「表示如果事实不是这样，自己不会持某种说法。强调自己对事情原委做的解释、判断是正确的、有事实做根据的」[53]。

③　280 - 1　一句话

このことばが表わすニュアンスは次の通りである――「表示自己要表达的全部意思用一句简单的话就可以概括，下文说出这话的具体内容。含有果断、坚决的意味」[54]。

④　284 - 11　各显其能

龐太監と秦仲義は表面的には相手を持ち上げた言辞を互いに交すが、内心は敵意を抱いている。秦仲義は「284 - 9　我那点儿威风在您面前可就施展不出来了」とへり下っているが、実際は相手をバカにしている。また龐太監は「284 - 11　咱们八仙过海，各显其能」と続けて秦仲義を評価しているように見えるが、新興勢力に対する伝統勢力からする「お手並拝見」といったところである[55]。

㈡接尾辞

北京方言にはかなり多くの動詞接尾辞がある。『茶館』の第一幕で用いられているものは「达」「莫」「乎」「腾」である。これらについてみてみよう。

① 达 da

「达」は書面では「搭、嗒、哒」と書かれることも多い。「达」を付けて常用される動詞は引申義を生じさせるのが普通であり、時には単独で用いられる時の常用義を失なってしまうこともある。これらは擬声詞から変化したものであるか、それとも詞根に実義があるかによる違いであろう。「达」を加えることのできる動詞は「敲击、跳跃」といった動作を示す単音節語であり、発音が「达 da」に近い単音節動詞（掸 dǎn、打 dǎなど）には「达」は付かない[56]。

接尾辞「达」は詞根に対してその勢いを減じる働きをする。つまり書面語にした場合、「达」をとって、そのかわりに動詞の前に「稍微、轻轻」のような制限詞を加えることができる[57]。このような「da」を動詞接尾辞とする語があるのは北方語の特徴で、南京官話には見られない[58]。

「达」を付す動詞は普通ABAB式の重ね型となるが、AABB式が可能な場合もある。趙元任は「生き生きとした意味を表わす重ね型」と呼んだが[59]、このようなAABB式の動詞重ね型は動作の状態を描写するもので形容詞的性格を持つとされる[60]。

『茶館』の用例では　283 - 23　我愿意蹓跶蹓跶　のようにABAB式がある。

② 莫 mo

「mo」の表記は多様である。「咂摸、约摸、嘬抹、琢磨、揣摩、揣摹、辱莫」の「mo」はすべて接尾辞「莫」と同一系統と考えてよいだろう。

280 - 3　咂摸　zámo　は「琢磨」と同義である。「摸」または「磨」に意味はない。

③ 乎 hu

この「乎」にも意味はほとんどない。それゆえ、280 - 8　我老觉乎着咱们的大缎子，川绸，更体面！　の「觉乎着」は「觉得」と同義であるという釈義を加え「民国时期京城流行语」に挙げられている[61]。

④ 腾 teng

「腾」は勢いを増す意味を表わす。ちょうど「达」と対照的である。また「粗率、放恣、随便」といったニュアンスを加えることもある[62]。280 - 8　折腾　は「不循规蹈矩，任意行动」と説明される[63]。

これらの接尾辞は単に北京口語のみならず、東北全域、東北官話区及び山西方言区やその他の地域の口語にも見られるものであり、近代漢語の早期の口語に既に存在している[64]。そしてもともと北京方言あるいは北方方言である「蹓跶」「翻腾」などは現在では『現代漢語詞典』に収められ、既に普通話に吸収されている。

㈢その他

① 爷

第一幕の登場人物で「爷」と呼ばれるのは、松二爷（三十来岁）、常四爷（三十来岁）、秦仲

义=秦二爷（二十多岁）等でいずれも若い。年長者とは限らない。社会的地位がある人に対しては「爷」の尊称をつけるのが当時の習慣であったことを反映した表現である。北京語の「爷」の呼称は明代に遡るという[65]。当時成年男子に対する、礼儀上欠かすことのできない呼称であった。

② 们

「们」は必ずしも複数を表わすとは限らない。 278-2　老娘们儿 lǎoniámenr(表記は「老娘们」)は「指妇人，含轻蔑意，是不美的语言。“娘”niáng变读，丢掉韵尾。或说 lǎoniármen」[66]のように単数複数の別はない。

「娘儿们　妇女们自己的合称

　娘们儿　对妇女的指称，语气不文雅，不礼貌」[67]

の部分も参考になろう。

③ 您哪

280-10　您哪　nínnaは「北京土语习惯，把对对方的客气称呼置于句尾，加用“哪”为助词」[68]とあるように、「您哪」は北方語で二人称の敬称として用いられるが、南京官話では用いられない[69]。『小額』に句末に限って用いられている用例がある。『小額』で使用されている言語は「旗人の口語を忠実に反映し、清末旗人語の実態を知るべき絶好の資料として、きわめて重要」[70]とされる。

また、侯宝林の相声に北京方言の特徴を強調するところがありその部分に「您哪」が用いられている[71]。

結語

『茶館』には数種類の版本がある。主として初出と上演後の単行本に異同がある。これは、舞台上演にあたって演出家や俳優が提起した意見に老舎が従ったためである。書き換えは、北京方言を普通話に変えたり、文意を明確にするために行なわれている。これは第一幕の版本の異同によって知ることができる。

『茶館』のことばは普通話である。短いセリフのなかに人物の性格や時代背景を表すことばを効果的に使用している。北京方言の使用は極力抑えられている。わずかながら使用されている北京方言は、主に接尾辞「达」「莫」「乎」「腾」などを伴う詞語である。これらの詞語は普通話の語彙に吸収されているか、あるいは吸収されつつあるものである。これによって北京以外の土地の人が聞いても理解でき、それでいて北京味を出すことに成功している。

〔注〕

(1) 曹禺《〈老舍的话剧艺术〉序》克莹、李颖编《老舍的话剧艺术》文化艺术出版社、1982年１月、p. 3。
(2) 蓝爱国《解构十七年》华东师范大学出版社、2003年9月、p. 245。
(3) 拙稿「老舍『茶館』札記」『文学部論集』第89号（佛教大学、2005年3月）参照。
(4) 老舍《答复有关〈茶馆〉的几个问题》《剧本》1958年5月号。
(5) 胡絜青《关于老舍的〈茶馆〉》克莹、李颖编《老舍的话剧艺术》所收。初出は《戏剧艺术论丛》1980年第２辑。
(6) 《座谈老舍的〈茶馆〉》《文艺报》1958年第1期。
(7) 『茶館』の原型は『秦氏三兄弟』と考えてほぼ間違いないであろう。拙稿「老舍『茶館』札記」参照。
(8) 陈徒手《老舍：花开花落有几回》《人有病　天知否》(以下《人有病》と略記) 人民文学出版社、2000年9月、所収、p. 73。
(9) 于是之《老舍先生和他的两出戏》《北京文学》1994年第8期。
(10) 欧阳山尊、1998年10月16日の口述。前出、《人有病》p. 49に拠る。
(11) 彭新琪の証言。蔡兴水整理《关于〈收获〉的一组谈话》《新文学史料》2003年第1期〔2月〕。
(12) 《发刊词》《收获》创刊号〔1957年7月〕。
(13) 前出、《人有病》p. 80。
(14) 梁秉堃《大家都叫他老赵》《传记文学》2005年第１期。
(15) 『老舍全集』刊行以前に『茶館』の版本を比較した主な論文に下記がある。
　ⓐ 高橋弥守彦「『茶館』の版本比較と時代的考察（その１）」『20周年記念論文集』大東文化大学教養課程委員会、1988年3月、所収。
　ⓑ 高橋弥守彦「《茶館》の版本比較と時代的考察（その２）」『語学教育研究論叢』第５号（大東文化大学語学教育研究所、1988年3月）。
　ⓒ 高橋弥守彦「『茶館』の版本比較と時代的考察（その３）」『大東文化大学紀要（人文科学）』第27号［1989年3月］。
(16) 舒济《记老舍作品在人民文学出版社的出版》《〔人民文学出版社建社五十周年纪念文集〕我与人民文学出版社》人民文学出版社、2001年3月、p. 297。
(17) 前出、舒济《记老舍作品在人民文学出版社的出版》p. 301。
(18) 前出、胡絜青《关于老舍的〈茶馆〉》。
(19) 英若诚、1998年8月18日の口述。前出、《人有病》p. 89に拠る。
(20) 注(19)に同じ。
(21) 王朝闻《你怎么绕着脖子骂我呢》《人民戏剧》1979年第7期。
(22) 例えば、王建华《老舍的语言艺术》北京语言文化大学出版社、1996年1月。
(23) 《中国大百科全书·戏曲曲艺》中国大百科全书出版社、1983年8月、p. 355。
(24) 蒋瑞整理《焦菊隐排演〈茶馆〉第一幕谈话录》(以下《焦菊隐》と略記) 北京人民艺术剧院《艺术研究资料》编辑组编《〈茶馆〉的舞台艺术》(以下《舞台》と略記)p. 200。
(25) 夏淳《〈茶馆〉导演后记》《舞台》p. 226。
(26) 張恨水の発言。《座谈老舍的〈茶馆〉》《文艺报》1958年第1期。
(27) 前出、王朝闻《你怎么绕着脖子骂我呢》。
(28) 注(27)に同じ。
(29) 前出、《舞台》p. 6。
(30) 前出、《舞台》p. 263。
(31) 注(30)に同じ。
(32) 前出、《舞台》p. 5。
(33) 注(32)に同じ。
(34) 徐志诚编著《现代汉语口语词典》辽宁人民出版社、1991年7月。
(35) 常锡桢编著《北京土语》文津出版社、1992年6月、p. 116。
(36) 谢昭新、许德《从〈四世同堂〉到〈茶馆〉》崔恩卿、高玉琨主编《走进老舍》京华出版社、2002年2月、p. 156。
(37) 前出、胡絜青《关于老舍的〈茶馆〉》。

(38)　前出、《焦菊隐》《舞台》p. 195。
(39)　金受申《老北京的生活》北京出版社、1989年12月、pp. 157-160。金受申《北京通》大众文艺出版社、1999年1月、pp. 352-355。
(40)　张清常《北京街巷名称史话》北京语言文化大学出版社、1997年7月、pp. 23-26。
(41)　前出、金受申《北京通》p. 354。
(42)　李家瑞編《北平風俗類徵》(1937年)、上海文艺出版社影印本(下册) p. 435。
(43)　前出、金受申《北京通》p. 491。
(44)　ダニエル・デフォー著、平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』岩波文庫、1971年9月、(下巻) p. 265、p. 291。
(45)　蓝翔、冯懿《中国·老360行》百花文艺出版社、2003年1月、p. 755。
(46)　加藤鎌三郎『北京風俗問答』大阪屋號書店、1924年9月、pp. 60-62。
(47)　郑观应《盛世危言》中州古籍出版社、1998年9月、p. 292。
(48)　王好立《从“夷”到“洋”》张亦工、夏岱岱主编《割掉辫子的中国》中国青年出版社、1997年5月、pp. 9-10。また、前出、常锡桢编著《北京土语》p. 72を参照。
(49)　贾采珠编《北京话儿化词典》语文出版社、1990年9月、p. 375。
(50)　阎崇璩「老舎《茶馆》词语浅释」『中国語研究』第23号（采華書林、1984年9月)。
(51)　郭伏良《新中国成立以来汉语词汇发展变化研究》河北大学出版社、2001年4月、pp. 136-137。
(52)　沈建华编著《汉语口语习惯用语教程》北京语言大学出版社、2003年3月、p. 26。
(53)　常玉钟主编《口语习用语功能词典》北京语言学院出版社、1993年8月、p. 217。
(54)　前出、常玉钟主编《口语习用语功能词典》p. 221。
(55)　前出、王朝闻《你怎么绕着脖子骂我呢》。
(56)　周一民《现代北京话研究》北京师范大学出版社、2002年8月、p. 24。
(57)　前出、周一民《现代北京话研究》p. 27。
(58)　太田辰夫「北京語の文法特點」『中國語文論集』汲古書院、1995年5月、p. 256。
(59)　Y. R. Chao “A Grammar of Spoken Chinese”, Univ. of California Press, 1968, p. 205。
(60)　前出、周一民《现代北京话研究》p. 25。
(61)　白公、金汕《京味儿》中国妇女出版社、1993年10月、p. 187。
(62)　前出、周一民《现代北京话研究》p. 48。
(63)　前出、阎崇璩「老舎《茶馆》词语浅释」。
(64)　前出、周一民《现代北京话研究》p. 54。
(65)　前出、周一民《现代北京话研究》p. 103。
(66)　徐世荣《北京土语辞典》北京出版社、1990年4月、p. 238。
(67)　前出、徐世荣《北京土语辞典》p. 295。
(68)　前出、徐世荣《北京土语辞典》p. 298。
(69)　前出、太田辰夫「北京語の文法特點」p. 248。
(70)　太田辰夫『中国語史通考』白帝社、1988年6月、p. 355。
(71)　侯宝林(对口相声)《戏剧与方言》《侯宝林相声选》人民文学出版社、1980年1月、p. 322。

[付記]
本稿は、平成16年度佛教大学教員研修（一般）の成果の一部である。

（つじた　まさお　中国学科）

2005年10月19日受理